

# 空の発見

*Discovering the Sky*

2024年9月14日（土）－ 11月10日（日）

●前期：9月14日（土）－10月14日（月・祝）

●後期：10月16日（水）－11月10日（日） ※会期中、一部展示替えあり



①小林正人《絵画=空》1985-86(昭和60-61)年 東京国立近代美術館

## ◆展覧会概要

私たちが毎日見ている「空」。現代では誰もが共通のイメージを描けるあたりまえの存在に思われます。ところが日本の美術のなかでは、近世になるまで「空」を現実的に描こうとする意識は希薄でした。障屏画では黄金地や金雲などがこの空間を占め、水墨画では余白のような位置づけである時もあります。もとより「空」（そら）は（くう）とも読めるように、神の世界である「天」でも、人間のいる「地」でもない、曖昧な場所でした。

近世になると、西洋絵画などの影響を受け、洋風画や泥絵、浮世絵などに青空が広がりだします。なかでも江戸時代、たびたび青空を描いた画家の司馬江漢（1747-1818年）が、蘭学から地動説を学び、科学的な空間認識を持っていたことは、「空」への意識の変化を考えるうえで示唆的です。一方で、浮世絵のなかの典型的な空の表現“一文字ばかり”のように、その表現は形式的、概念的なものであることもありました。

明治以降、本格的な西洋画教育や、科学的な気象観測の導入を受け、刻々と変化する雲や陽光を写しとろうとする画家たちが登場します。ところが次世代には、表現主義やシュールレアリスムなどの新潮流の影響のなか、自らの心象をこの空間に托すように多様で個性的な「空」を描く画家たちが続くのです。

そもそも、私たちの視点はふだん地上に向けられ、絵の中で「空」が主役となることは稀です。地上で震災や戦災が起こり、人間の活動がなぎ払われたとき、廃墟上に広がる空、戦地で見上げた空などが、突如重い存在感を持ちだします。目の前にありつつも意識されなかった空間が大きく浮かびあがる様子は、認知の不確かさを物語ります。

現代、かつては従属的であった「空」を中心に据えることで、表現に活路を見出すアーティストたちも現れました。見えているけど、見えていない。本展は、こうした「空」の表現の変遷を通じて、そこに映し込まれる私たちの意識の揺らぎを浮かび上がらせようとするものです。

## ◆ 展覧会構成

### 1章 日本美術に空はあったのか？—青空の輸入

太古からずっとそこにある「空」。同じものを見つけているはずなのに、伝統的な日本の美術のなかに見いだすその姿は、現代、私たちがすぐに思い描くイメージとは、やや様子が異なる。

《京都名所図屏風》②などの障屏画にたびたび登場し、どこを漂っているのか判然としない「金雲」や「すやり霞」。狩野探幽の水墨画③のように文字を書き込める「余白」も兼ねる空のスペース。かたや現代の定型表現「青空と白雲」は近世になるまであまり描かれなかった。やがて洋風画④や泥絵、浮世絵⑤など西洋の影響を受けた絵を中心に、青空が広がり始める。本章では、こうした日本の美術のなかの多様な空の表現を紹介する。

### 2章 開いた窓から空を見る—西洋美術における空の表現

窓から外を眺めるような写実性が目指されてきた西洋美術の中では、空を「リアル」に描くことも追及されていく。やがて刻々と移り変わる大気をも写しとるような「風景画」で名を成すイギリスのコンスタブル⑥などの画家も登場する。本章では英国のコンスタブルやフランスのブーダンなど「空の名手」の作品を中心に、西洋美術と日本美術の視点を比較する。

### 3章 近代日本にはさまざまな空が広がる

近代の日本では、油彩画などの写実的な絵画技法を学ぶ画家らがいる一方、横山大観など日本画家のなかでも変革への試みが行われる。英国美術の影響を受け、雲の観察を重ねた武内鶴之助⑦や、独自の迫真性を追求し夏空を描いた岸田劉生⑧がいる。だが、表現主義、シュールレアリスムなど様々な新潮流が日本に流れ込むなかで、若き日の自画像に、緑とオレンジの雲を描き込んだ萬鉄五郎⑨など、空はいつしか画家の心象や夢を自由に表出する場へと変貌していく。本章では近代日本のさまざまな空模様を追う。

### 4章 宇宙への意識、夜空を見上げる

私たちはいつから、あの空の向こうに多くの天体がある別の世界が存在することを知ようになったのだろうか。葛飾北斎の『富嶽百景』⑩には天体観測の様子が描かれており、江戸時代には徐々に「宇宙」の認識が広まりつつあった。それは絵の中で「空」の表現が拡大していく時期とも不思議と重なる。本章ではこの他に明暗表現の意識が乏しかった日本美術の中で、迫真的な「闇」を描き出した近代の高橋由一の作品⑪なども紹介する。



②



③



⑤



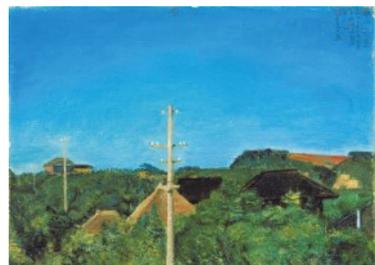
⑥



⑦



⑨



⑧



⑩



⑪

②松川龍椿《京都名所図屏風》(左隻) 江戸時代後期 国立歴史民俗博物館 [右隻・左隻の展示替えあり] ③狩野探幽《富士山図》1665(寛文5)年 板橋区立美術館  
④若杉五十八《鷹匠図》江戸時代 東京藝術大学 [後期展示] ⑤葛飾北斎《富嶽三十六景 山下白雨》江戸時代 埼玉県立歴史と民俗の博物館 [後期展示]  
⑥ジョン・コンスタブル《デタム谷》1805-17年頃 栃木県立美術館 ⑦武内鶴之助《雲》1910-12(明治43-45/大正元)年頃 目黒区美術館  
⑧岸田劉生《窓外夏景》1921(大正10)年 茨城県近代美術館 ⑨萬鉄五郎《雲のある自画像》1912(明治45)年 (公財)大原芸術財団 大原美術館  
⑩葛飾北斎《富嶽百景》(浅草鳥越の不二図) 1834-36(天保5-7)年頃 千葉市美術館 [前期展示] ⑪高橋由一《中洲月夜の図》1878(明治11)年 宇都宮美術館

5章 カタストロフィーと空の発見

そもそも絵のなかの視点はいつもは地上に向けられ、空そのものに焦点があたることは少ない。翻って空がクローズアップされる時、それは地上で異変が起こったサインでもあった。

1923（大正12）年の関東大震災時、東京に駆けつけた池田遙邨（ようそん）はその体験をもとに禍々しい大空が広がる《災禍の跡》<sup>⑫</sup>を描くが、日本美術界ではあまりに異質な表現として当時は受け入れられなかった。

第二次大戦時の出征時の思いを、香月泰男は穴底から見上げた空<sup>⑬</sup>として象徴的に表現した。写真家だった濱谷浩は、終戦の日にただひっそりと太陽を撮影し<sup>⑭</sup>、現代の米田知子の写真<sup>⑮</sup>では、過去の悲惨な記憶を想像するよすがの空間として今の青空がある。

本章ではカタストロフィーによって露わになるもうひとつの空の姿を追う。

6章 私たちはこの空間に何を見るのか？

現代、かつては背景や脇役に過ぎなかった空を主役に据えることで、見ることや認識の仕組み、あるいはアート自体を揺さぶろうとするアーティストたちが登場している。

一瞬一瞬で移り変わる雲を、概念の姿のように抽出してみせる小林孝亘<sup>⑯</sup>。他方AKI INOMATAは、最新のデジタル技術によってその一瞬をとらえ、雲を飲むという行為で肉体の記憶として固定しようと挑む<sup>⑰</sup>。

空を度々主題とする阪本トクロウは、自らの作品の中心は「空洞」と述べ、意味性を追求する現代美術へのアンチテーゼを提起する。一方、小林正人の《絵画＝空》<sup>①</sup>の大画面は、絵画という枠を超え、空間として私たちを包む。本章では様々に空と向き合う現代のアーティストたちを紹介する。



⑫



⑭



⑬



⑮



⑯



⑰

⑫池田遙邨《災禍の跡》1924(大正13)年 倉敷市立美術館 ⑬香月泰男《青の太陽》1969(昭和44)年 山口県立美術館  
⑭濱谷浩《敗戦の日の太陽》1945(昭和20)年 東京都写真美術館 ⑮米田知子《道一サイパン島在留邦人玉砕があった崖に続く道》2003(平成15)年  
東京都写真美術館 ⑯小林孝亘《Cloud》1998(平成10)年 群馬県立近代美術館寄託 ⑰AKI INOMATA 《昨日の空を思い出す》2022(令和4)年 作家蔵  
※参考図版 Photo: Hayato Wakabayashi

◇ 会期中イベント

① アーティスト・トーク1「無有に遊ぶ」  
日時：9月28日（土）午後3時－（約1時間30分）  
講師：阪本トクロウ氏（画家、本展出品作家）  
聞き手：当館学芸員  
場所：地下2階ホール

※無料（要入館料）※定員60名（要事前申込、抽選制）  
② アーティスト・トーク2「空をのむ」  
日時：10月12日（土）午後3時－（約1時間30分）  
講師：AKI INOMATA 氏（現代美術家、本展出品作家）  
場所：地下2階ホール  
※無料（要入館料）※定員60名（要事前申込、抽選制）

③ 特別講座「空の発見 見えているけど、見えていないものはどのように描かれてきたか」  
日時：10月26日（土）午後3時－（約1時間）  
講師：平泉千枝（本展担当学芸員）  
場所：地下2階ホール

○ 学芸員によるギャラリートーク  
9月20日（金）、10月5日（土）、10月20日（日）  
各日午後2時－（約40分）  
※無料（要入館料）※各回定員20名（事前申込不要）  
○ フライデーナイト館内建築ツアー  
白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。  
日時：会期中の金曜日 各日午後6時－（約40分）  
※無料（要入館料）※各回定員20名（事前申込不要）

### ①～③事前申込イベント申込方法

往復はがきまたは当館HPの申込フォームにて承ります。1通につき1名のお申込みが可能です。

【往復はがき】〒・住所・氏名（ふりがな）・日中連絡可能な電話番号、参加希望のイベント名をご記入の上、空展イベント係まで。

#### 【申込フォーム】

当館HP上 (<https://shoto-museum.jp/exhibitions/205sora/>) の各イベントフォームからお申込みください。

※締切（いずれも必着） ① アーティスト・トーク1：9月17日（火）

② アーティスト・トーク2：9月30日（月） ③ 特別講座：10月13日（日）

※迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に当館からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン受信設定をお願いいたします。

※締切日後4日間以内に抽選結果通知が届かない場合はお問い合わせください。

展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となる場合がございます。最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。

## ◇開催概要

展覧会名 空の発見 *Discovering the Sky*

会期 2024年9月14日(土)ー2024年11月10日(日) ※会期中、一部展示替えあり

前期:9月14日(土)ー10月14日(月・祝) 後期:10月16日(水)ー11月10日(日)

開館時間 午前10時ー午後6時(毎週金曜日は午後8時まで) ※入館は閉館時間の30分前まで

入館料 一般1000円(800円)、大学生800円(640円)、高校生・60歳以上500円(400円)、  
小中学生100円(80円)

※リピーター割引:観覧日翌日以降の本展期間中、有料の入館券の半券と引き換えに、通常料金から2割引きでご入館できます。

※( )内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料 ※土・日曜日・祝休日は小中学生無料

※毎週金曜日は渋谷区民は無料 ※障がい者及び付添の方1名は無料

休館日 月曜日(ただし9月16日、23日、10月14日、11月4日は開館)、  
9月17日(火)、24日(火)、10月15日(火)、11月5日(火)

主催 渋谷区立松濤美術館

会場 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14

電話: 03-3465-9421 HP: <https://shoto-museum.jp>

#### 交通案内

●京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

●JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

※駐車場はございません

#### ◆次回展覧会のご案内

「須田悦弘」

2024年11月30日(土)ー2025年2月2日(日)

### 報道関係のお問い合わせ

広報担当 [pr-sma@shoto-museum.jp](mailto:pr-sma@shoto-museum.jp) 電話: 03-3465-9421 FAX: 03-3460-6366

- \* 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。 \* 画像のご利用後、データは破棄してください。
- \* 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。 \* 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
- \* 掲載後、見本誌をご送付いたしますようお願いいたします。